

植物の育成になぞらえた育児論の系譜 I

藤田 博子

(浪速短期大学)

はじめに

わが国最古の古典である『古事記 712』には「如葦牙因萌騰之物而成神名、宇摩志阿斯訶備比古遲神……」と記されている。すなわち、われわれの祖である元始の神は、かがやかなみどりに萌える葦の芽から産まれたというのである。そして、そのひと柱の神の名は「宇摩志阿斯訶備比古遲神」として、葦の芽吹き立つ譬喩から名付けられている。それは、生き生きとつぐむ、みどりの葦の芽を神格化し、その繁栄としての人間も、その生命力と成長力により頼もうという願いが託されているのである。

こうした、人間の植物的譬喩は、国民を「たみくさ」と、やまとごとばでよんだり、嬰兒を「みどりご」、「青農」とよぶことや、産土という言葉などにもあらわれている。

さらには、祝詞の祈願章に「五十榎八桑枝」（榎の木の枝が激しい勢いで茂り立っているように、人間が激しい勢いで成長し、立ち栄えていきますように）との言葉がある。

このように、わが国においては、神代の昔から、人間の成長が植物の成長になぞらえられてきたのであり、そのために、植物の育成になぞらえた育児論が数多く伝えられてきたのである。

1. 香月牛山の育児論

ことに、江戸時代、育児書が庶民の女性を対象として著されるに及んで、そうした育児論は頂点に達することとなる。

そのもっとも顕著な例が、貝原益軒の弟子であり、医者であった、香月牛山、本名啓益(1656-1740)が元禄16年(1703)秋に上梓した『小児必要養育草』である。この書は、小児の誕生・生育・病氣・教育などにわたって全六巻からなり、日本で最初の育児書とされる。

この書に展開される育児論は、ルソー(J. J. Rousseau, 1712-78)が1762年に著した『エミールÉmile ou de l'éducation』に酷似しているが、『エミール』を先駆すること59年の卓越した育児論である。

さらには、『エミール』が、その献辞でも明らかなように、当時の貴族階級の女性を対象に書かれたのに対して、牛山の育児書は、筑前植木逸民香月五平子秀房が書いた序に「…仮名にてかきて、『小児養育草』と名付け、婦人・愚夫のもてあそびぐさともせよとて、故国なる家族にしめす。……いかんぞ家族のみにして吝かにせん。梓にちりばめて世とともにもてあそばさば、育草はびこりて、裔のひこ孫、瓜・こうりの蔓のうま子を見ん事、終わるときあらんや」とみるように、庶民の女性をはじめとするあらゆる人々を対象として著された書である。そのことは、この書が庶民教育の普及に努めたという意味からしても、その卓越性が評価できよう。

この書はその表題にみるように、育児を「育草」として、

草木の育成になぞらえているのであるが、序にも「古人、小児を芽児といい、また嫩葉嬌花といいて、草木の初めて萌え出、花の初めてほころぶに例えれば、育てざらめや…」と述べている。

巻一 (1) 小児養育の総論

「啓益、つねに一つの例をあげて、養育の道にうとき人をさとす。いま、木を植うるを見よ。分寸の苗を植えて、その木、尺に余るまでの時を、よく培い水をそそぎ、虫・蟻などの災いなきようにして、その芽を折らぬように心を付けて、二、三尺までも育てぬれば、その後は大抵にしても、その木かならず合抱ほどの大木となる。一寸の時より二、三尺までの内をよく育てざる時は、合抱ほどの木となる勢いありとて、幹はほそく枝やせて、何の用にも立ちがたし。あまつさえ二、三尺をまたずして枯落するがごとし。されば百尺の松も、一寸の時をよく養い得て千年の青き操をあらわし、七尺の人も、一尺の時をよく育て得て百年の寿を保つ事を知るべきなり。」

同 (2) 誕生の説

分娩とは、和訓「さねばなれ」とよみて、木の実の熟して、肉と核と分かれ離るごとく、または瓜の熟しておのずから蒂の落つごとく…」と出産を植物の実りになぞらえている。

巻二 (1) 生まれ子養育の説

「…風の氣・日の目にもあわせぬように育てたる児は、その色も黄ばみしらけ、皮膚もうすくして、風をひきやすし。たとえば日陰に生いたる草のごとく、軟らかに弱くして、風の氣・日の目などにあえば、脆く萎れやすきをごときを知るべし。」

「『万全論』に、田舎のいやしき人の、小児を育つるに、病という事なし。これをたとうるに、深山或いは広き野原に生いたる木は、たやすく合抱ほどの大木となる。或いは珍しき果のなる木、また妖しき花の咲く類の木の、人の愛し重宝するは、これに培い水をそそぎ養いを加うれども、秀でたる事なく、たやすく果も実らず、花も咲くことなく、あまつさえ枯るにいたるがごとし。に見えたり。しかれば、小児をそだつる事は、ただ野山の草木のごとく、風の氣・日の目に当たらしめて吹きすかすようにすれば、よく盛長するなるべし。…」

「『千金論』に……つねに土と水を愛させて、育つべきなり。といえり、……貴きも賤しきも、児を育つる事、上にいう所のごとくすれば、その益甚だ多し。心得べき事なり。」

以上の引用は、牛山が庶民階級の女性やその夫のために仮名であらわした育児論中、植物の育成になぞらえた箇所の一部である。

たしかに、庶民階級の人々に育児論を説くにあたっては、

植物の育成になぞらえることは、身近にして、具体的で説得力があったに違いない。それでは、当時の武士階級の育児論についてみれば、どのようなものであったのだろうか。

2. 上杉鷹山の育児論

当時を代表する世子教育の著として名高い、上杉鷹山の『輔儲訓 1775』と『蒙養訓 1795』にも、やはり、植物の育成になぞらえた育児論が顕著に見受けられる。たとえば、「子を育て候事も、花樹に培するが如くなることに候。春を待て苔める花を、年の内より咲かせんと、色々様々の手入れをし、室に入れ、火にあて候らえば、その花、咲くとは雖も、陽和の時を得し花樹に比し候えば、その色香も薄く、賞瓶もこれなく候。人の育つも、その如くに候。専ら成長の時に臨み、強いて成人の道を以て誡責せしめ候時は、英邁の氣象を折き、或いは病身となし、また手薄く成り立ち候。ただ、その時を失わざるこそ專要に候え。『論語』の開卷第一儀にも、「時習」とこれにあり候。細かき事は、まずまずそれまでにして、英気を長じたま事に候。ただ、本根の筋違なき様に、教諭これ有りたま事に候。」『輔儲訓』

「未だ幼稚の事に候えば、今日の上はまずまず曲節を生ぜず、春陽に草木の枝葉を長じ候如く、唯ぞわぞわと成長致され候事。……草木を育て候にも、その花実の時に及んで俄に手入れ・養いを致し候ては、よき花実は得られぬことに候。春の芽ふきより夏の成長するに随って、その時々の手入れ・養いをよくし候えばこそ、その花も麗しく、その実も豊熟致す事に候え。人の上もその如し、年頃になりたりとて俄に教え導き候とても、その未だ幼若・無知と見なし置き候内に、いつしか物に染み事にふれてその性を損ないし後、教導に入り難く相成る事に候。故に今日の養いは後の教えの基にて、後の教えの成就是今日の養いの功にて候。」『蒙養訓』

3. 植物の育成になぞらえた育児論の起源

以上のようにみてくると、植物の育成になぞらえた育児論が農耕に従事する庶民階級の人々のみに用いられたのではないことが如実に知れる。

それでは、こうした、植物の育成になぞらえた育児論の起源はいったいどこにあるのであろうか。

まず、牛山について考察してみると、牛山は『小兒必要養育草』において、日本の国風や『日本紀』、『東鑑』、『小笠原家諸礼』などを参考にしてはいるものの、以下のように、実に膨大な中国の医書と医学を援用して育児を論じている。

『魏略』	魏代(220-265)	の佚書	
『千金論』	唐代(618-907)	の医書	孫思邈著
『法苑珠林』	唐代	の仏教故事	
『聖濟經』	宋代(960-1279)	の医書	徽宗著
『聖惠論』	宋代	の医書	
『全要方』	宋代	の医書	鄭端友著
『嬰幼論』	宋代	の医書	鄭惠卿編
『統博物志』	宋代	の著	李石の著
錢仲陽(錢乙)	宋	の医家	

王珪(王隱)の説	元代(1388-1644)	の医家	
『赤水玄珠』	明代(1368-1644)	の医書	孫一奎著
『嬰童百問』	明代	の医書	魯伯嗣著
魯伯子の説	明代	の医家	
『証治準繩』	明代	の医書	王肯堂著
『幼科準繩』	明代	の医書	王肯堂著
『古今医統』	明代	の医書	
『博愛心鑑』	明代	の医書	魏直著
『保嬰撮要』	明代	の医書	薛鎧著
『集驗方』	明代	の医書	羅浮山人著
『全幼心鑑』	明代	の医書	寇平著
『万病回春』	明代	の医書	壘廷賢著
徐春甫の説	明代	の医家	
『五雜俎』	明代	の隨筆	
李梴の説	明代	の医家	
果元方の説	清代(1636-1912)	の医家	
『万全論』	清代	の医書	王雄著
『詩經』	周代(1000B.C. 頃)	の詩、儒教の経典	
『礼記』	前漢(50B.C. 頃)		
『小学』	宋代(960-1279)	の修身・作法書	

以上の夥しい中国の書物や説を援用し、「人の父母たる者、常にこのむねにつけて、思いおうて、その子を教うべき事なり。その教えの品々は、聖賢の諸書に詳らかなり。いまここに記す所は、万分がひとつにして、婦人・愚夫の見るに便するものならし。」と結んでいる。豊後中津侯の侍医であった牛山は、当時隆盛を極めていた中国の医学を援用すると同時に、中国の育児思想をも併せて援用しているといえよう。

翻って、上杉鷹山は、当時、行政刷新、産業奨励に尽力した米沢藩主として名声を馳せ、興讓館を建てて藩士を教育するなど、武士教育に功績を遺した人である。

『輔儲訓』は、安永五年(1775)、世子治広の近侍に与えて補導の心得としたものであるが、鷹山自身、幼年の頃から御傳役に恵まれていて、その教育は儒教道德に貫かれた世子教育であった。そうしたところから、儒教の思想に依拠した育児思想を展開しているといえよう。ことに、『論語』[学而第一]の「時習」を、子どもの育成と、植物の育成における[適時性]の重視として言及しているところは、鷹山の植物の育成になぞらえた育児論が、儒学に源をもつことを如実にもの語っている。

〔参考文献〕

- ・山住正己・中江和恵 編注『子育ての書1』東洋文庫 平凡社 1976年
- ・荻原浅男・鴻巣隼雄 校注『古事記』小学館・刊 1992年
- ・辻本雅史 著『近世教育思想の研究』思文閣出版 1992年